

## ことばの相談



増井 美代子

### はじめに

「カ行の発言ができない」とか「ほとんど意味のあることばが言えない」とか「どもる」とか「声か鼻にかかる」など、ことばの相談に訪れる子どもの問題は様々です。最近、特に「ことばを覚えない」「教えようとしても聞いていないし、こちらの言うことを理解しない」「受け答えができず、コマージュナルなどを一方的にしやべっている」など、「人とのやりとり」の道具としてのことばが身につかなくて困っているという相談をよく受けます。相談を受けているとおのずと「これは一体どういふことなのだろう。この親子にどういふお手伝いができるのだろう」と考えざるを得なくなり、最近の私の関心は、専らこういう子どもたちとの臨床に向けられています。

たくさんの子どもたちに出会っていると、時折、あの子とこの子はよく似ているという想いがあります。もちろん、よくみると、やはりどの子も皆それぞれ違っているわけですが、その中の一人、Mちゃんについて書いてみたいと思います。

### Mちゃんのこと

Mちゃんは三歳二か月の時「ことばらしいことばはひとつもしやべらない。おちつきがなく、教えようと思っても聞いていないし覚えない」ということで相談につれてこられました。Mちゃんは男の子で、二つ違いの姉と両親の四大家族です。

一歳一か月で歩き始めるまでは、大きい病気もせず、たいして手のかからない赤ちゃんとして育ったそうです。歩き始めてから二歳頃までは、人見知りが強く、母親への「あと追いか」がひと

く、泣いてばかりいるので、抱いたまま家事をしなければならぬほどだったそうです。二歳のお誕生日を迎える頃には、やらせれば「イナイナイバア」「オツムテンテン」などの「芸」をするようになり、「Mちゃん」と呼ぶと「ハイ」と返事もするようになっていたのですが「パパ」とも「ママ」とも言わないので「ことばが遅いのではないか」と心配になりました。二歳三か月頃になると、ミニカーや汽車のおもちゃを並べてひとりですずかに遊ぶことが多くなり、おつかいに行く時もひとりですずかに歩いてゆけるほど「楽な」子どもになりました。

ことばのことが心配で小児科や児童相談所に行ってみたりしていましたが、たまたま二歳十か月の時、お母さんはテレビの「ことばの治療教室」という番組を見て、そこで言われていること、たとえば「相手をしてやろうと思っても物で遊んでいることが多い」「ひとりで勝手にどこかへ行ってしまうことがある」「人のまねをしない」「指さして知らせることをせず、人の手首をつかんでしてもらおうとする」などのことがMちゃんとあまりよく似ているので驚いて相談を申し込んでこられました。相談の順番を待っていたり三か月の間、「母親への手紙」というパンフレットを送って読んでいただき、家庭でできることを実行してもらおうことにしました。

## ことばの遅れ

そのパンフレットに書かれていることについては「言語発達の臨床」、「言語障害児の指導」やテレビの「ことばの治療教室」等をご覧いただければ良いわけですが、要約すると次のようなことです。すなわち「順調に育っている子どもを見ると、乳児期の母子のやりとりの中ではぐくまれていた母親との関係、特に母親に依存してすっかり安心しきっていられた関係が基礎になり、母親を安全基地として自分の世界を広げ日常生活のいろいろなことを身につけてゆく。その中のひとつとしてことばも習得してゆく。だから、ことばを順調に習得しそこねた子どもの場合でも、現在の年齢と関係なく、乳児が受けていると同質のサービスをたっぷり受け、母親といっしょにしていると「安心」「楽しい」「母親と同じでありたい」という気持ちが育ってくるのがまず必要であり、それが保障されれば、好奇心や探索、模倣、学習行動などはひとりでに、子どもの中から湧き出してくる」という考え方です。

## 出 会 い

はじめて治療室を訪れた時には、Mちゃんは大きい声でワーワ

泣いてお母さんの背中にしがみつこうにおんぶしており、なかなか床におりようとはしませんでした。時間が経つにつれて泣きやんで、やっと床に足をつきました。しかしそれでも、私どもがお母さんのお話を伺っている間ずっと、オドオドした様子でお母さんにピッタリとからだを寄せていました。

パンフレットを読んで、お母さんはお家でできる限りMちゃんの要求を受け入れて、だっこやぶざけっこなど、喜ぶことを捜してたくさん相手をするよう心がけていらっしやうたそうです。そうしているうちに次第に、Mちゃんは、よく泣く子になり、お母さんにベタベタと甘えることが多くなってきたそうです。でも、まだまだ放っておけばひとり遊んでいることが多く、そういう時には相手になってあげようと思ってもお母さんを無視するかのようになってしまうことが多いとのことでした。

Mちゃんの場合、乳児期にどういうわけかあまり手がかからずに済んでしまったために、泣いたり甘えたりしてお母さんを頼りにすることを十分覚えずに過ごし、二歳頃になってから甘えたり、「芸」をして人とのやりとりを楽しむようになり始めたのですが、その頃両親がことばの遅れを心配しはじめ、Mちゃんの気持とお母さんたちの気持がうまくかみあわなくなっていました。たのかもしれないと思われました。そして、お母さんがMちゃん

の気持を十分受け入れて相手をするよう心がけ始めたら、Mちゃんの方でも徐々に安心してお母さんを頼ることがふえてきており、面接場面でワーワー泣いてお母さんにしがみついているのも、お母さんの心がけてこられたことのひとつの成果に違いないと思われました。

そこで「Mちゃんを十分安心させること。そのためにはMちゃんの気持をできる限りよくわかってあげて、それに沿うような相手の仕方をする。喜ぶような相手の仕方を探して、みつかったらたくさんしてあげること。いやがった時無理してしてあげようとしない、やり方を直ちに変えてみる」となどを基本方針として、一週間に一回ずつおめにかかり、お母さんといっしょにMちゃんとのつきあい方を捜してゆくことにしました。

### それから

当時お母さんの背中におんぶしていることが、Mちゃんにとつては最も安心できる状態であるらしく、最初の一か月間は、治療室へ入るとよくお母さんにおんぶしていました。おんぶしているのだんだん安心してくるのか、おんぶしたまま、まわりの様子をチラリチラリと伺うように見、たまに私たちと目が合うとさっとお母さんの背中に顔をうずめていました。が、回を重ねる毎

に、おんぶしている時間は短くなり、お母さんのとなりにすわって積木を並べたり、ままごとの茶わんを五つも六つも積み重ねて持って歩こうとしたりすることがありました。積み重ねた茶わんがくずれ落ちると、カンシヤクを起こさずに何回でも拾っては積んでいました。そんなMちゃんの様子は、それが楽しくてしていると見うけられませんでした。むしろ慣れない場所に慣れない人といっしょにいる不安感や緊張感を払いのけるためにそれに没頭しようとしているかのように見えました。私たちが声をかけたり、手を出したりしても、それがMちゃんと楽しく遊べるきっかけにはならず、かえってMちゃんを不安からせてしまうようなので、積極的に働きかけることは控えていました。その頃から、家庭では人の顔をよく見るようになり、興味のあるものをたまたま指さしたり、家族の動作やことばをそれらしくまねすることも見られるようになってきていたということでした。

約二か月経った頃、治療室でも、急に人が変わったようにニコニコして、私たちの顔も恥ずかしそうな表情で見られるようになりました。でんぐり返しやだっこして回してあげるど声をあげて喜ぶようになりました。発声量、知っているものを指さして知らせること、ことばや動作のまね、などが急速にふえ、「ママ」「プー」「ヒコウキ」などのことばもそれらしく言うようになりまし

た。

通いはじめてから三〜四か月頃は、人にかまってもらうのが楽しくてしかたがないかのようにしきりと指さして知らせ催促するように人の顔を見るようになりましたし、「○○は？」と聞かれるとその物の方を見るなどのことができるようになってきました。治療室では茶わんを積み重ねてもって歩くことは全くしなくなっていました。大きな汽車のおもちゃに細々とした人形、ブロックなどのおもちゃをあるだけさせて、ひとつでも落ちるとまたのせて、全部のついでさえすれば安心して別の遊びができるというふうでした。家では、ひとり遊びは全くしなくなり、始終家族が相手をさせられ、少しでも気にいらないとぐずり泣きをするし全く「手のかかる」子になったということでした。

四か月頃、たまたま治療室でいっしょになったRくんとその妹のYちゃんと、その後はいっしょに臨床をすることにしました。この頃、治療室ではカエルの人形を三びきもって歩くことに凝っており、持っていさえすれば安心するのかわいさも持ったままRくんやYちゃんのことをして、それをチラチラと見ながら、お母さんや私たちを相手にままごことをしたりRくんたちのまねをしておりました。「オンプ」「マンマ」など、要求する時にもことばを使うようになり、お母さんにもむやみにベタバタ甘えることは少な

くなりました。

その後約三か月間は治療室へ入るとカエルの人形を離さず、遊びの内容も、ふとんに乗ってハンモックのようにゆずってもらう、鏡にサインペンでらくがきをする、Rくんたちのそばにすわってままごのようなことをする、何となく室内をウロウロ歩きまわる、などのことが大部分で、特別めざましい変化はみられませんでした。その頃の記録に「お母さんがとても疲れている感しで気になる。次回はRくんといっしょにしないでMちゃん母子だけで、ゆったりおちついた雰囲気やってみた方がいいかも」と書いてあります。そして次回は、この親子だけで臨床をしました。

七か目頃には、バス停でRくんの姿をみつけるとニコニコして近寄ったり、「Rくん」とつぶやくように名前を呼んだりするようにになりました。カエルの人形もすっかり忘れたように手にしなくなり、八か月頃には六十語ぐらいのことを言うようになります。十か月経った現在では「プール・ハイロ」「アン・ノセテ」など、たどたどしい調子ではあっても、二語つなげてしゃべることもしばしばあります。

先日、お母さんは「おもしろいくらい人の言うことをすぐまねて言うようになり、ずいぶんおしゃべりになりました。その点

ではあまり心配なくなったのですが、家の中にいると服を脱ぎたがり、寒いのに裸でいることと、おちつきがなく、いたずらが激しいので困ってしまいます」とおっしゃっていました。

茶わんを積み重ねて持つて歩くこと、汽車に細かいおもちゃをつめること、カエルの人形を必ず三びき離さないで持ち歩くことなどもそうでしたが、その時どうしてそうするのかと理由を考えたもよくわからないのですが、一方で子どもを安心させ、守り、喜ばせていさえすれば、いつの間にか「忘れるように」変わってくることが多いので、今お母さんが困っておられることもそんな経過をとるのだろうかと思っているところです。

#### 思うこと

田口先生が日ごろおっしゃっていることを、毎日、たくさんの子どもやお母さんと出合いながら、「あ、本当だ!!」「やっぱり!」「なるほど、こういうことだったのか」と、出会って始めてわからせてもらえる体験を始終しています。

たとえば、子どもの不安を除き安心させることは、本当に大事だと思えます。安心していなければ、じっと見たり聞いたり、変化を楽しんだりする余裕がないわけですから、いくら教えよう、見せよう、聞かせようとしても、まわりで起こっているそういう

ことに気づくはずがないからです。話しかけても無視しているようにひとりで勝手におもちゃを並べていたTくんの場合も、けだるそうにへやのすみでゴロンとねころんでばかりいたSちゃんの場合も、何とかして喜んでもらえらることを捜したいと思って、いきなり声をかけたりだっこをしたりすると、するりとぬけるように別の場所に移っておもちゃを並べたり、ねころんだりしていました。TくんやSちゃんをじっと見つめたり、声をかけたり、手をさしのべたりするのをやめて、お母さんのお話を伺っているとき、一時間近く経ってから自分からお母さんと私の話しているそばに寄ってきて、それでも子どもには働きかけずにお母さんと話し続けていると、そばにすわってひざにもたれかかってきました。そうやって仲よくなってしまうとは、ふざけるようにあやしてもよく笑いますし、だっこされることも好きになりました。いろいろな声を出しながら走るようにへやの中を行ったり来たりしていたNちゃんの場合もそうでした。TくんやSちゃんやNちゃんには「安心させるためには、ただやたらに働きかけてもだめ。十分にこちらを観察させる余裕を与えることが大事。十分観察してだじょうぶそうな相手だとわかれば、そこで自然に楽しいやりとりは生まれてくることが多い」ということを教えられました。

こちらが「こういうことをしてくれればいいな」と期待して、いろいろなことをしてみせている時には、なかなかそれに注意を払ってくれないし、まねもしないのに、私自身が楽しんで夢中で何かしている時にヒョイとそれをまねられてびっくりすることがよくあります。「してほしい」「してくれるかな?」という期待の気持や、ためすような気持は、こちらが考えている以上に敏感に感じとられてしまいます。誰とつきあう時でも、自分に素直な気持でいることが大切なのだどハッとさせられました。

赤ちゃんとお母さんのやりとりを見ていると、赤ちゃんが泣くとすぐに、お母さんはしていた事を途中でやめても、おせわをしたりあやしたりしています。この「タイミングよく」応ずるということが、その人を頼り信頼する（やがてはその人自身に興味を持ち、みようみまねでまねて、ことばも覚える）関係ができるのにはとても大切な事だということもたくさんの子どもとお母さんから教わりました。朝、目がさめた時すぐにお気に入りのことをしてあげると、その日一日親子共に調子よくすごせることが多いとか、何かしてほしがった時にすぐに応じてあげるとほんの少ししてあげただけでも満足するのに、こちらの用事を済ませてからと思っただけだと、あとになっていくらたくさんしてあげても満足できないらしく喜ばないので、お母さんもうどうして良いのか

わからなくなってしまうなどということですが。

「そんなに子どものいうなりになっていたら、わがままな子に育ち、しつてもできないのではありませんか」とおっしゃるお母さんもたくさんいます。乳児が受けているようなサービスを十分受け、お母さんを頼り安全基地にするようになれば、お母さんの気持を察することができるようになり、しつてもできてくるのだということは、実際に親子の関係がそうなってきた時にはよくわかってもらえるのですが、心配になっている時に実行してもらおうのはなかなかむずかしいことです。先のことを思ってもうたがらないで「子どもを十分受け入れて安心させ、こわがらせたりいやがらせないように」という方針にケチケチしないで徹しきってもらうためには、お母さん自身が安心できなければなりません。今している私たちの仕事の大部分は、お母さん自身が安心して喜べるようお手伝いすることなのかもしれないと思っっています。子ども、お母さん、臨床家が、お互いに安心させあい喜ばせあうことができている時に、はじめて良い臨床ができているのだらうと思います。

私は今、大病院院の中で、ことばの相談を受けていますが、安心して信頼し喜びあえる先輩や仲間を得ていることをたいへん幸せに思います。

最近強く感じていることのいくつかを書き並べましたが、もしかしたら、これはもう十年も前から聞かされていたことかもしれないと思いつつ、学生時代に受けた講義のノートを見返しています。  
(聖マリアンナ医科大学)

#### 参考資料

一、田口恒夫編 「言語発達の臨床」 光生館・一九七四 (「母親への手紙」は、この本の一八八―一九八ページ)

二、田口恒夫編 「言語障害児の指導」 全国言語障害児をもつ親の会発行

——ことばの遅れた子の育て方——一九七五

——話せない子・質問と答——一九七五

——話せない子・質問と答第二集——一九七五

三、NHK教育テレビ「ことばの治療教室」毎月第二週、ことばの発達の遅れシリーズ

注、Mちゃんとの臨床は、治療室のスタッフである中台憲子、神礼子さんといっしょに行なっているものです。